

教育
相談室

カウンセラーの窓から

自分ひとりの力では、どうしようもない辛い状況に陥ってしまったとき、身近にいる誰かに相談できると、できない子がいます。

中学三年の那美(仮名)は、打ち込んできた部活動を引退すると、心にぽっかりと穴があいたような無力感に襲われ、時間はできたのに学習成績は伸びず、遅刻しがちになっていました。母親はそんな那美を励まし、時には叱りながらも、仕事のやりくりをして学校まで送り届けた日もありました。

ようになり、無事に進学していきました。

一方、誰にも相談できない子の心理には、「分かってほしい。」という思いを抱えながら「こんなこと相談したら、変に思われないうか。」「余計な心配はかけたくない。」などという思い込みが働き、相談にまで至らない場合があります。また、思い切って話したの

「声にならない声」を受けとめたい

にすくい取って、話をじっくり聴いてあげることから始める必要があります。

例えば、

- ・食欲がない。
- ・何度も起こしてやつと起きる。
- ・朝、トイレからなかなか出てこない。
- ・友だちの事を聞いても「別に」とはぐらかす。
- ・いろいろな事をして聞いている。
- ・兄弟に八つ当たりする。

といったちよつとした子どもの変化が、そのサインと言えるでしょう。「声にならない声」をキャッチし、誠実に話を聴く姿勢を日ごろの関わりの中で繰り返すことで、「分かってもらえる。」話してみよう。」という気持ちで、子ども心の中に増していきます。

困ったり、迷ったりした時に、身近にいる誰かに相談して安心したり、何らかの解決策に気付いたりしながら、自分の気持ちに向き合うところに、「子どもの心の成長」もあるのではと、相談を受けながら感じています。(T・S)

那美が変わるきっかけとなったのは、「悩みアンケート」に思い切った「誰かに相談したい。」と書いたことでした。まず、担任が、自分に自信を失っている那美の気持ちに付きましました。それから、本人をよく知る部活動や保健室の先生、そして、カウンセラーが、それぞれの思いで言葉をかけて見守ることで、那美は徐々に落ち着いて行きました。やがて、進路選択にも自力で向き合える

に聞き入れてもらえなかった、という苦い体験から、「相談しても何も変わらないし、話をしても無駄。」というマイナスの感情を持っている子どもも少なくありません。では、子どもたちが「一人で悩むより、誰かに話ができただけの方がずっと気分は楽になる。」と思えるようになるには、どう関わりと良いのでしょうか。まずは、学校や家庭の中でその子が発しているSOSのサインを見逃さず

ひとりでなやまないで ヤングテレホン にお電話ください

丹南青少年愛護センターでは、青少年やその保護者からの相談に応じています。あなたの気持ちが整理できるかもしれません。学校のこと、家庭のこと、友だちのこと、聞かせてください。

丹南青少年愛護センター 52-6114
鯖丹支所 月~金 8:30~17:15

「はぐくみ」は、家庭のあり方についてみなさんと一緒に考えていきたいと願って発行しております。子育てのヒントになればと思います。ご意見をお聞かせください。

鯖江市教育委員会生涯学習課 TEL 53-2256

はぐくみ

家庭教育を考えるシリーズ

発行
鯖江市教育委員会
鯖江市社会教育委員会
青少年健全育成鯖江市民会議

協力
丹南青少年愛護センター鯖丹支所

43号

子どもは 社会の宝です



鯖江幼稚園『おさーさんだよー』



吉川小学校『稲刈り』



東陽中学校『体育祭のフィナーレは、皆でフォークダンスを』



片上小学校『幼小連携・おねえちゃんが教えてあげる』

自己有用感とは？

自己有用感とは、どういう意味でしょう。それは家庭や学校、あるいはそれぞれが所属している集団の中で、自分が認められている存在だと自分自身が感じ取ることを言います。そのことによって、自信が生まれ、問題行動に走ることはないと言われています。



「食事をみんなで」から

「食事の準備をみんなで」

子どもと一緒に食事の準備をしてみてはどうでしょうか。子どもが作った料理をみんなで食べて「おいしかったよ」と伝えてみましょう。きっと子どもは笑顔になり、自分に自信が持てるようになります。自分に自信をもっている子は、悪い誘いのりません。

「あなたのおかげよ。」

助かったわ」

と言葉で伝える

子どもが頑張ったことを言葉や態度にあらわし喜びを伝えます。家族が「うれしい」と言えば、子どもは「認めてもらっている」と感じるのではないのでしょうか。家族の一員としての居場所がある子は、友達をも尊重します。

子どもの声に耳を傾ける

子どもが不安そうにしているれば、抱きしめてあげますね。子どもの声を聴くことは、子どもを抱きしめることと同じです。そのことにより、子どもは抱きしめられているのと同じ安らぎを感じます。愛情を感じている子は、人に対しても優しくできます。

「〜するな」(禁止)ではなく

「〜しよう」(導く)に

子どもたちは否定されたと感じると、心を閉ざしてしまいます。「□□するな」と禁止するのはなく、具体的に「○○しよう」と話しかけてみたらどうでしょうか。考えさせ、選択させる中で、子どもは成長し自立していくものです。自立していくことは、子は、自分自身を大切にします。

涓滴

十人十色 どの色も美しい

暗いニュースの多い中、嬉しいニュースの一つに、京都大学山中伸弥教授のノーベル医学・生理学賞受賞がありました。多くの人たちに、日本人としての誇りと自信を呼び起こしてくれたホットニュースでした。

誠実に記者会見に臨んでいた教授の人柄に惹かれ、さっそく購入して読んだ自伝には、けして順風満帆ではなかったこれまでの道のりが綴られていました。特に、整形外科医を目指していたころ、通常二十分で終わる手術に二時間かかり、それ以後指導医から「ジャマナカ」と呼ばれていたというエピソードには、本当に驚かされました。技術者を父に持ち、小さい時から機械いじりをしていたので手先は器用だったようですが、人間が相手だと緊張して思い通りにできなかったと述懐しておられます。不名誉なあだ名で呼ばれ、無力感に苛まれながらも、ご自身が好きな言葉「人間万事塞翁が馬」のとおり、その後もピンチをチャンスに変えすばらしい業績をあげていく姿には、自分自身をあきらめない粘り強さが感じられました。

十人十色。人にはそれぞれの生き方があります。どの色が優れているか、と比べるのは無意味なことですが、ともすると私たちはその意味のない比較を生き方についてもやろうとするのです。そうではなく、自分の好きなものの得意なものをみつけ、それを大事にしながら、歩んだ道に自信を持って生きる、そうした生き方を大切にしたいと思えます。

われわれ大人の役割は、みずからの生き方を子どもたちに示すと共に、子どもの可能性を信じ、がんばっていることを褒め、自分がかけがえのない存在であることを自覚できるよう成長を見守ることです。親の愛情とはそうしたものでないでしょうか。

「涓滴」とは「しずく」という意味。しずくも集まれば、やがて大河となることの願いを込めて。